資料１

これまでの協議会における主な意見について

（子どもの様子や教育を取り巻く環境に関わる意見）

・集中して何か物事に取り組む子どもが減ってきている。
・落ち着きがない子どもが増えている。
・家庭に親がいない時間が長い子どもが増え，生活習慣が乱れている子どもも増えている。それでも，昔の子どもであったら非行に走っているところであるが，今の子どもたちは学校では頑張っている。
・テレビ，ゲーム，スマートフォンに関わる時間が増え，家庭学習の時間が減っている。
・学習障がいの傾向を持つ子どもなど特別な支援を要する子どもが増えている。
・本来身に付けておくべき態度が身についていない子どもが増えている。
・友達とうまくやっていけない子ども，場の空気を読めない子どもが増えている。一方，そういった子どもの親は悩んでいる。
・運動に熱心な子どもと，全く運動に興味が無い，運動できない子どもの二極化が進んでいる。
・他の子ども，教員とのコミュニケーションがしっかりと取れない子どもがいる。
・教育扶助，就学援助（要保護・準要保護）の対象となる子どもの割合，ひとり親家庭の割合が高い。
・異年齢との関わりが函館の場合は少ないように感じる。
・函館は，教育に関わるイベントが多くあるが，意識の高い親は連れて行くが，全く関心のない親は連れて行かない。子どもによって体験の機会に違いが生じている。
・地域や社会から孤立している家庭が多くなってきているように感じる。

（目指すべき人間像に関わる意見）

・ホスピタリティの心を育てて，それを通じて地域のことを好きになってもらう。仮に函館を離れても，そういった心を持っていれば，何年かのちに戻ってきてもらえることにもなるかもしれない。これを教育に活かすことが重要である。
・未来に生き続けるための基本的な能力として，コミュニケーション・ツールを自由自在に使えること，意見・宗教・文化などの違う人々とも一緒にうまくやっていけること，自分自身を理解して，自分一人でも歩いて行ける自覚と意識を高い次元で持つこと，これらが重要となる。
・個性を伸ばすことが重視されることにより，勉強だけではなく，スポーツなどでも

才能を開花させる子どもが出てくるのではないか。

・学校は一つの枠，ベースにきちっとはめてから，もう少し個性を伸ばすことを大切にするが，今は，ベースにはめること自体が難しくなってきている。先生方は個に対応する頻度が増えている。

・周りの人から勉強以外のところでも何か得意なところがあるのを認められるという環境が必要でなないか。また，周りも気づく力が必要ではないか。そういったことは学校へ行きたいという意欲にも繋がるのではないか。

・障がいを持っている子ども，不登校の子どもの中には特別な才能をもっている子どももいる。個性が伸びてくるような機会がどこかで必ず必要である。

・不登校の子どもは学校に来られなくても，１人１人の個性を伸ばし，大事にする社会であることがいいと思う。

・個性を伸ばす教育には，１番上，ダントツ１番を育てることと，恵まれない環境にいる子どもを救うことの２点が大切になると思う。この２点ができれば，函館の教育の底上げどころか，世間に注目されると思う。

・子どもたちが自主的に学び，子ども同士の関わりや，やり遂げた喜びなどを通じて自主的・主体的な問題解決能力が身につき，自らが開拓していく勉強の面白さが得られるような学びのスタイルを確立することが大事であり，学校全体が一律的に主体的な学びを完成させていく必要がある。

・課題解決型学習においては，リーダーシップ，ファシリテーション能力，コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力などの伸長に効果がある。縦のつながりや，学び合い，自発的な調べ学習などを通じて様々な能力が育っている。

・知識を周りに吐き出すことによって，自分の知識が確かなものになる。コミュニケーションをとることは重要である。

・仕事の大変さへの気づきが子どもの頃から感じることができる教育であってほしい。周りに感謝しながら育つことによって，函館の郷土愛が生まれるのではないか。

・深く深く考えていく，熟慮する，そういう人間を育てることが鍵になる。すべての学習過程に自分で責任を持ち，自分の学びは自分で設計していく，それは知的な人間としての自律である。

・どこからでも夢をみつけることができる，探し続けることができる人間，どんな立場になるかわからないし，どのような状況になるかはわからないにしても，自分は何とかそこからやっていけるという，そういうハードルをクリアしていく，そういう人間を育てていかないといけない。

・働くこと，そのものに価値を見つける。人の役に立つことが結局働くことだという，それが支え合って社会が成り立っていることを教育に埋め込んでいくべきだ。

（まちづくりの視点に関わる意見）

・私立高等学校ではボランティア・奉仕活動を積極的に行っている学校が目立つように感じられる。公立高等学校も魅力ある高等学校づくりのため，まちへ直接出て活動させる取り組みがもっと必要ではないか。
・魅力ある学校づくりのために，地域の人の様々な意見を聞きながら教育活動に取り入れていく必要がある。
・函館の「食」は世界的に認められているところであり，食資源やそれを調理するシェフも育っている。食育に今一度力を入れてやっていければよい。
・地域住民と子どもたちが一緒に学び，教え合うなどの機会は，函館を好きになる１つの策となるのではないか。
・大学でインプットしたものを地域でアウトプットする，その逆で地域からインプットしたものを学校でアウトプットする，社会性と結びつけるそういったことは非常に重要である。
・地域貢献と教育を結びつけるというのが一番大事である。
・仕事の大変さへの気づきが子どもの頃から感じることができる教育であってほしい。周りに感謝しながら育つことによって，函館の郷土愛が生まれるのではないか。
・働くということそのものに価値を見つける。人の役に立つことが結局働くことだという，それが支え合って社会が成り立っていることを教育に埋め込んでいくべきだ。
・汗をかいて働くこと，実際現場に出て汗をかいて働き，怒られながらも仕事の手順を覚えていく。こういう体験が子どもたちには必要ではないか。バーチャルではなくて，実際に体験させてあげられればと思う。
・歴史は地域最大の財産である。函館の歴史教育には一つのフォーカスが当たるかもしれない。
・地域学習から得られる知識は，その地域でしか通用しないものかもしれないが，地域に対する限りない愛は，そこから生まれてくると思う。そういう骨格的な学習は，幼児教育の段階から一貫した函館の学びのスタイルとして有効ではないか。
・函館はひとり親家庭の割合が高いが，子どもを支援することでその母親を支援することになる。正のスパイラルへの道筋をつけることは，函館の教育の一つの目標ではないか。
・モデルとなって自分もそのように生きたいと思う人を間近に見ることができることが，小さい頃から機会として多くあるといいと思う。子どもにとってモデルとなるものは，まず家庭にあるが，函館は母子家庭が多いなどの課題も多く，家庭の他に素敵なモデルがあれば，そういうふうに生きたいと思える子どもたちも増えるように思う。

・縦の接続をいかにうまく繋げていくかは，親と子どもと社会・コミュニティとの連携が重要である。社会的に家庭を支援していく，あるいはお互いに学び合うような機会を設けることが連携に重要である。
・生活習慣や身に付けておくべきことが身に付いていないことなどに対して，学校でできることには限界がある。親になって初めて育児などを学んでいくが，それは，横の連携・協働を担うＰＴＡ活動や地域などが関わっていくことが重要ではないか。
・家庭，学校，地域，企業など函館全体が連携して，子育てができるまちづくりができ，そんな大人たちを見て育った子どもが, 函館に住む大人と同じように子育てをしていくといった連鎖が生まれることを願いたい。
・学校でない，フォーマルではない場の，ノンフォーマルな場において，子どもと学校の先生ではない人々とのつながりをもっと作っていくことができないだろうかということを感じる。学校のカリキュラムや時間には，限界が感じられる。
・学童保育所も楽しんで学べる場であるといいのではないか。（プログラミングの体験, スポーツなど）　そのことによって集中力のない子どもが夢中になって取り組む場として充実していくのではないか。
・アクティブ・ラーニングの視点を核にして，様々な分野（体育，理数教育，歴史教育など）で函館の教育のスタンダードが構成されれば，函館はとても素敵なまちになると思う。
・地域とのつながりなど函館の特色を活かしたＩＣＴ教育があってもいいのではないか。
・若い起業家を育てる。働く場が少ないのであれば，自分自身が起業してリーダーになっていくという意欲を持つ学生を育てるようなことが必要だ。そのための支援も設けられればいい。
・起業をしたい若者に対しては，起業の成功例やノウハウを伝える機会が必要。
・経営者は，経済のことはもちろんのこと，地域の歴史やマーケティングなども勉強しているので, そういった経営者の生の声を中学校･高校の子どもたちに届けられればいい。こういった経験と函館が好きだという思いの両面のところが大事になると思う。
・優秀な学生ほど函館を出て行く。それを止めることはやはりもったいないことだ。そういう学生には，日本だけに留まらず，世界へ羽ばたいてほしい。
ただ，そういう子どもたちにまた戻ってきてもらえるぐらいの素晴らしい企業や学校が函館にあったらいいと思う。
・函館から出て行っても，函館を応援してくれる人になってくれればいい。そういう刻印を残すような教育であるべきだ。